



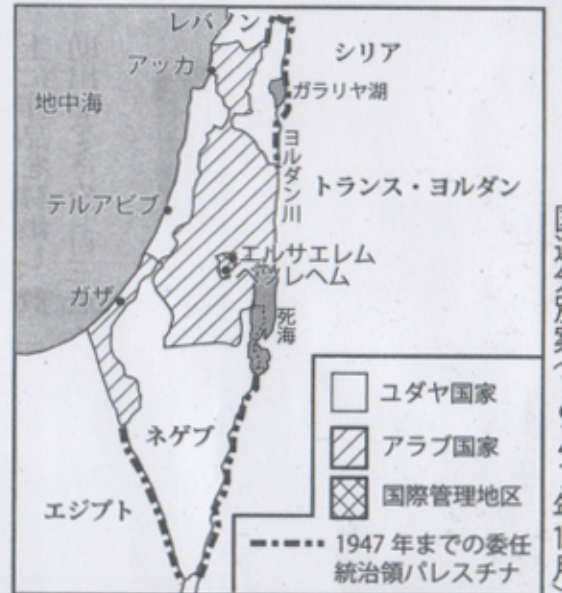
ガザからの木箱に涙する パレスチナ巡礼⑦

二十年振りにパレスと思つたからだ。ちよチナを訪れた目的の一端を連載五百回の節目「巡礼の道」の連をきよう迎えた。載十年を記念し、パレ スチナに十年間スチナについて書こう 住み、パレスチナ難民



ガザの木箱

国連分別案(1947年11月)



支援を続けている娘が 九三年にイスラエルと 今回の旅を企画してく PLO(パレスチナ解放機構)との間で合意 回を祝つてガザの人が がなされ、少し平穩を 作つた木箱が送られて 取り戻したところだった。 きた。中にはガザの海 しかしすでに陸の孤島 岸でとれた一枚の貝殻 となり、イスラエル側 が入つていた。 の検問を受けて入つた。

何より私の心を打つ たのは、木箱のふたの 絵である。子供が凧(た こ)をあげ、川にはア ヒルが泳いでいる。紛 争の地パレスチナ、今 呼ばれるガザも、昔は のどかで住み良い土地 であつたことを訴えて いるように思える。 前回のガザ訪問は一 九九六年。長いパレス チナ紛争のあと、一九

パレスチナの現在



枚の貝殻。ガザは海中 海に面しているが、海 難民生活を強いられて いる。

から出る自由があるか といえ、沿岸航行権 はイスラエルの手にあ り、貝殻はそれすらの 自由もない現実を物悲 しげに語りかける。 今、陸の孤島。国際管 理されるはずのエルサ

レムはイスラエルが占 領、併合し、今、イス ラエルは長門市とほぼ 同じ広さ。そこに約百 七十万人が閉じ込めら れる。こんな理不尽なこ とがまかり通る国際社 会なのである。

同じ敗戦を体験しな がら今は平和な生活が 送れる日本。一方、一 方に土地を奪われ、 難民生活を送るパレス チナの人たち。ガザか らの木箱を見ていると 思わず涙が出る。こん な報告が五百回の節目 とは情けない国際社会 の現実がここにある。